

江戸に見る 子供の風景・家族の絆

江戸に幸福力を学ぶ人情噺の会
(旧久松町倶楽部) 第四回

蒔蓄齋髭丸

人情噺とコミュニケーション

- **第一回** 8月30日 『百年目』 ←【終了】
– 上司部下の人間関係 & 太鼓持ち（幫間）
- **第二回** 11月8日 『芝濱』 ←【終了】
– 夫婦の間柄 & 夫婦の風景
- **第三回** 1月24日 『文七元結』 ←【前回】
– お金を通した人間関係 & 江戸の商人道
- **第四回** 3月28日 『子別れ』 ←【今回】
– 親子、家族の絆

親と子のことわざから

- 親思う心にまさる親心
- 親の心子知らず

- 親も親なら子も子
- 蛙の子は蛙
- この親にしてこの子あり

親と子のことわざ その2

- 親の恩は子を持って知る
- 親孝行、したいときには親はなし
- いつまでもあると思うな親と金

- 打つも撫でるも親の恩
- 打たれても親の杖

親と子のことわざ その3

- 生みの親より育ての親
- 生んだ子より抱いた子

- 親に目なし
- 親の欲目
- 親の甘茶が毒になる

親と子のことわざ その4

- 親の意見と冷酒はあとで利く
- 親の意見と茄子の花は千にひとつも無駄はない

- 子に過ぎたる宝なし
- 千の倉より子は宝

- 持つべきものは子
- 無い子では泣かれぬ

子育ては、親育てなのです。

～誰もが悩みながら親になってゆきます～
児童心理学者 佐々木正美氏

- 育児は育自
- 子どもの成長を待つ勇気がありますか？
- 子どもは自然 養老孟司氏
(大人にとって異質な存在)
- 子育ては、プロジェクトXだ！

子育ては誰の役割？

- 最近では、父親の子育て参加が注目を浴びている。
- **子育てに性差はない！**
 - 育休パパを持つママの確信
 - 女性は子育てに向いているのではなく、経験を通じて、母親になってゆく

育休パパが日本を救う？

- 仕事で怒らなくなる（円滑なコミュニケーション）
 - 本人も我慢強く？忍耐強くなる。
- 結果、周囲のやさしいキモチを呼び覚ます！？
 - 家族の事情を職場全体で共有し、理解する経験をする
- 本人の隠れた能力の発掘！
 - 実は、妻よりも子育てに向いていたり。
 - お弁当王子。
- そもそも育児に性差はない！！
 - 育児センサーが、パパもちゃんと働く

ところで、絆って何？

- 断つことのできない人と人との結びつき
- ほだし（絆し）とも言う
- もともとは、馬や犬をつなぎとめておく綱のことで、自由を奪う、拘束するという意味の言葉
- 平安中期の辞書「和名抄」に記載あり

ほだし

絆

きずな

もともとは**束縛**という、**マイナス** の意味が強かった (河合隼雄氏)

- たとえば家族があまりベタベタしている家では子どもがなかなか自立できません。
- **絆がプラスの意味に使われているのは、現代が家族の関係が薄くなってきたから**です。
 - なくなってしまったので、**必要なもの、あったほうがいいもの**として、家族の絆というふうに使われるようになった。

家族の絆があるからこそ 自立ができる

- 絆がなければ、断ち切るものもないので、自立もできない
- 絆は、今は見えにくくなっている
- 現代に必要なのは、つながりのある自立
(神田道子氏：国立女性教育会館館長)

自立とえば、心の安全基地

- ジョン・ボウルヴィ提唱
– 母と子のアタッチメント（愛着形成）
- 成長過程における基本的信頼感の形成
- 安心して外に出てゆけるし、戻れば喜んで迎えてくれるという確信
- 情緒が安定し、チャンスをもものにできる子どもの多くには、子どもの自立を励ましながらも、必要なときには必ず存在して、応答する親がいる

絆といえは、もうひとつの
キーワードは、「結ぶ」

結ぶ、娘、息子、みんなムス

(中西進氏著作より)

- 男女が出合って新たな縁を作ることを「むすぶ」という
 - ムスは、発生する、生まれる：苔むす
 - ムスに、こ、め がつくと、むすこ・むすめ
- むすぶことは新しく誕生する命の永遠を願うこと、特別な価値を持つ行為
 - 人と人、人と自然がひとつになり、つながったところに命が生まれる。それを日本人は、むすぶと表現してきた。

江戸末期～明治初期の外国人の見た

江戸の子どもものいる風景

みんなが驚いている！

渡辺京二著「逝きし世の面影」

桐山圭一著「江戸宇宙」

等より

子どもの楽園、子ども天国

日本について「**子どもの楽園**」という
表現を最初に用いたのは、
オールコックである（渡辺京二氏）

オールコック (初代駐日イギリス公使)

- イギリスでは、近代教育のために子どもから奪われつつある美点を持っている



- 日本の子どもたちは、自然の子であり、彼らの年齢にふさわしい娯楽を十分に楽しみ、大人ぶることはない



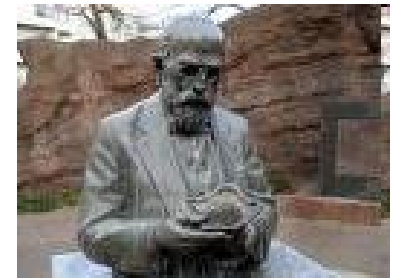
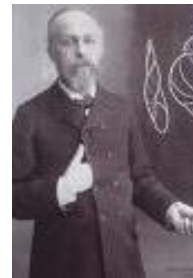
イザベラ・バード (英国人女性旅行家)

- 私はこれほど自分の子どもをかわいがる人々を見たことがない。子どもを抱いたり。背負ったり、歩くときには手を取り、子どもの遊戯をじっと見ていたり、(中略) 子どもがいないといつもつまらなそうである
(栃木県日光での光景)



モース (アメリカ人の動物学者)

- 日本は**子ども天国**である
- 世界中で日本ほど、子どもが親切に取り扱われ、そして**子どもの為に深い注意が払われる国はない**。**ニコニコしている所**から判断すると、子どもたちは**朝から晩まで幸福であるらしい**。



温厚と寛容の国

- 幕末明治期に来日した外国人の目に映った日本の徳目としての寛容
- それは親と子の姿によく現われていた。子どもに罰を与えて厳しく育てるのとは違う。親は子どもに対して寛大すぎるほど寛大。
- 両親が子どものために捧げ続ける思いやりや愛情を受けて育った子どもたちは、その返礼であるかのように、親に報いるのである
(オランダ人フィッセル)

北山修（編）の共視論

- 子どもと同じ目線でものを見る日本の浮世絵の構図
- 「語られた過去」の分析の延長線上で、興味をもったのが「描かれた過去」としての浮世絵のなかの母子像。
- 親の子へまなざし
- それを描く側の心理
- 西洋の絵画では、
描かれている親子は、
相対の構図ばかり

それでは、

少し登場人物のイメージや流れを

子別れ

江戸中期に完成したお噺だそうです。

当時は、離婚すると男の子は男親につく。
(この噺は、妻に子どもがつく)

円朝さんは夫婦逆転バージョンにもトライ

好いていても分かれる話は幾らもあるけれど、最後につながるのはあまりない。
その鍵が子ども。

主人公は、 いわずと知れた 大工の熊さん

- **しっかりものの奥さんと息子が亀吉**
- **お葬式のあと勢い込んで吉原へ。その後の浮気が元で、大変なことに。。。**
- **その後、改心して、仕事をしっかり。**
 - **半纏をどっさり着て（得意先がたくさん）**
 - **職人さんの腕がいいと、取引先の半纏をいただく（何うときにはもちろん着てゆく）**
- **そして、子どもが縁で。**
- **後半の舞台は鰻屋。**

江戸の4大外食料理

- 文化文政時代（1800年代前半）の4大外食は、

蕎麦（そば）、鰻（うなぎ）、
鮓（すし）、天麩羅（てんぷら）
- 鰻井は文化年間（1810年前後）から
- 文久年間（1862～3年）鰻井が200文。
（かけそばが、この頃20文）

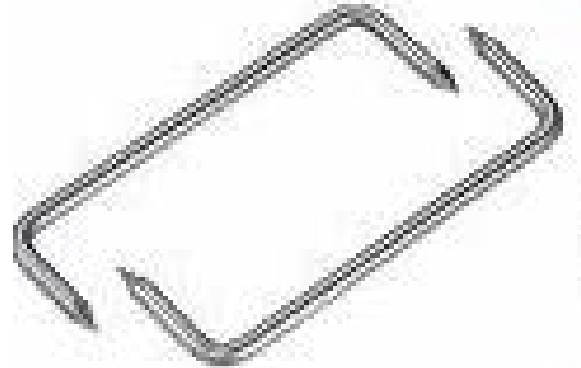
辻焼きの 鰻はみんな 江戸後

- 江戸前とは、江戸湊でとれる魚介のこと
- 江戸前を最初に使ったのは鰻で、深川や浅草川や神田川が本場
- 江戸の蒲焼は、背開きで白焼きにしてから、蒸して脂抜きして、タレを付けて焼く

(京大阪は、腹開きにしてそのままタレをつけて焼く)

子は鎧（かすがい）

- 夫婦の間をつなぎとめるものとして、子どもが存在、そのものですね。



もうひとつの観点は、

世代と世代を繋ぐ（未来を繋ぐ）
希望の鎧も、きっと、

子どもなのでしょう。

本日はご清聴ありがとうございました。
こころより御礼申し上げます。